熊野の森から

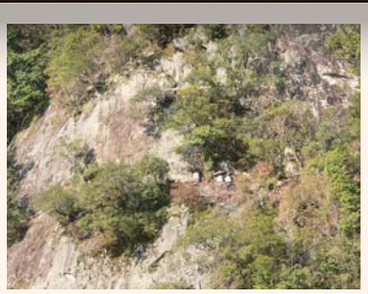
怪しの熊野

其の六九

「旧・中辺路町の怪異（其の三）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

旧・中辺路町は、熊野古道に沿って幹線国道が通り、外国人も多く訪れる観光地だ。その昔は、古道を行き来する人もまばらな山深い場所であった。あまりにもへき地であったため、いくつかの集落では、明治時代に子どもの教育が免除されていたほどであった。山深い場所のためか、狼（オオカミ）にまつわる話がいくつも伝わっている。



中辺路の小広峠付近には狼の怪異話が伝わる。峠の近くの絶壁には、いつもゴウラ（ニホンミツバチの人工巣）が置かれているが、その姿を見る度に圧倒される。

例えば、今ではトンネルで抜けることができる小広峠は、昔はうっそうとした峠道で、さまざまな化け物が現れる場所であった。それらから旅人や村人を守ってくれる狼の群れがいたことから「吼比狼（こびろう）峠」と呼ばれるようになり、やがて小広峠となったという。また、峠の周りの山々では、夜中に狼がいっせいに吼（ほ）えることがあり、人々は「千匹狼」と呼んだ。なんでも、狼が吉野の修験の山、大峰山の山上ケ岳へ参るために勢ぞろいしているのだという。

ヒトツダタラと狼の怪異話が残る中辺路の温川（ぬるみがわ）は、怪異話とは無縁の地だと思える穏やかな雰囲気の里である。かつては周辺の総産土神（うぶすながみ）であったという春日神社のお姿も、とても穏やかである。

温川（ぬるみがわ）では、狼に助けられた庄屋さんの話が伝わる。ある夜、庄屋さんが夜遅くに帰ってきたとき、狼が着物の裾をくわえて引っ張る。気持ち悪かったけど引っ張られるままについて行くと、洞穴に連れ込まれた。狼に食われると覚悟を決めたとき、穴の外でドシン、ドシンと大きな足音が聞こえる。一本足の怪物ヒトツダタラの足音であった。庄屋さんは、狼がヒトツダタラから救ってくれたと感謝したが、お礼を持ち合わせていなかったので「自分が死んだら亡きがらをあげよう」と狼に伝えた。狼はすぐに姿を消したが、庄屋さんが亡くなった後、墓があばかれ亡きがらが無くなっていた。この怪異は代々ずっと続いていたという。狼に自分の体を差し出すという話は、山を越えた龍神村にも伝わっている。

峠の怪異ということでは、十丈峠の辺りではダルに取りつかれることがあるという。ダルは、このコラムでも何度も登場した熊野の代表的な妖怪で、取りつかれると空腹感に襲われ、ひどいと餓死者のようになって行き倒れてしまう。このため、峠を越える際は、ひと粒でいいから飯をもっておき、取りつかれたら食べると良いという。この話は、他の場所でのダルの話とほぼ同じだ。それだけ、熊野の山中を歩くのが容易ではなかったことがうかがえる。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。